

読みごたえある「記録」

1984年版『中国年鑑』の発刊に寄せて

子どものころ、正月を迎える楽しみの一つに『少年倶楽部』新年号があった。夢を満載した絵や読み物、それに付録もすばらしく、その発売日が待ち遠しかった。いまは、もちろん『少年倶楽部』の新年号を待つ感激はないが、正月前に中国新聞社の『中国年鑑』を手にすることの楽しみは、あのころのそれと一つである。

近年、『自分史』をつくるのが静かなブームとなっているとき。自分の生きざまを書物にして残しておくというのだが、そのように、書物の形にしないまでも、正月休みに、アルバムや日記を整理して、一年の歩みを振り返ることも必要であろう。私が、『中国年鑑』に出会ったのは、つい数年前の正月のこと、日記を整理しようとしたときのことであったが、手ぎわよくまとめられたその資料は、書き忘れた日記の余白を埋めるのに役立つ。

さて、1984年版『中国年鑑』は、編集も構成も、前年のそれとほとんど同様で変わりなく、それだけに、親しみをもってみることができるといえる。その主なものは、「記録」「要覧」「名簿」「統計」であるが、なかでも、「記録」は読みごたえがある。ことに、地域誌『中国年鑑』ならではのハヒロシマの記録Ⅴには、平和を願う市民の心が読みとれて毎年感動させられる。「ザ・デー・アフター」のテレビ放映を契機に、核軍縮の声が日増しに高まっていく中で、この記録は重要な価値をもつ。また、ハ日誌Ⅴは、国内外のできごとを的確にとらえてまとめであり、ハ10大ニュースⅤとともに、「記録」の主要な部分をなしている。

私は、週末やときに日曜にかけて、名所旧跡を訪れることがあるが、「便覧」の△文化財▽に、史跡や名勝を紹介してあるのはうれしい。また、△季節の名所▽をとりあげてあるのもよい。△国民宿舎・ユースホステル▽の一覧もあるから、この項は、ちょっとした旅行ガイドである。さらに、私は「要覧」の△沿革▽や△観光▽を読んで小旅行に出かけるのであるが、そこには、名所旧跡地の歴史的社会的背景がえがいてあって、旅を楽しんでくれている。

『中国年鑑』の大きな部分を占めている「名簿」は、この種の書物に欠かせない資料であるが、これと、別冊の「会社録・人名録」を併せて利用すれば、名刺つづりや電話帳代わりにもなって重宝である。

小学生から社会人まで利用するであろう「統計」は、土地・人口から産業・労働・教育等の各方面にわたって、最新の資料を提供しており、中国地域に限定されているものの、それだけに、詳細で正確で有用である。そのほとんどは二次資料であるが、しかし、出典が明示されていて信憑性しんぴやうは高い。

ところで、『中国年鑑』の中核をなしているものは何であろうか。「要覧」「名簿」「統計」も主要な事項であろう。しかし、私は、「記録」こそがその中心的な役割を果たしていると考ええる。この観点から『年鑑』をみると、その「記



昭和44年 13回生クラス会（国際ホテル）



昭和55年 13回生クラス会 (いろりや)

録」の項の紙幅は、決して多いとはいえない。そこで、思うのだが、「便覧」のハスポーツの記録Vをこの項に移行し、また、新たにハ文化・芸術の記録Vでも設けるならば、すでに一般の評価を得ているハヒロシマの記録Vと併置することになり、この「記録」の項は、量的にも質的にも向上することになるのではなかろうか、と。

こうして、『中国年鑑』が、地域性に富んだ「記録」を中核として充実される時、中央紙のそれに比しても、ユニークな『年鑑』としての評価を得ることになる。中国新聞社に期待するところ大である。

中国新聞(昭・58・12・5)